



令和4年4月12日

東京都千代田区四番町5番地3
科学技術振興機構（JST）
Tel：03-5214-8404（広報課）
URL <https://www.jst.go.jp>

戦略的創造研究推進事業における2022年度新規研究領域と研究総括の決定 および研究提案の募集について

JST（理事長 橋本 和仁）は、文部科学省が設定した2022年度戦略目標を受け、戦略的創造研究推進事業「CREST」「さきがけ」および「ACT-X」において、新たに6つの研究領域を設定し、その研究総括を決定しました。この6研究領域を対象として、2022年度の研究提案募集を2022年4月12日（火）から開始します。

本事業は、社会・経済の変革をもたらす科学技術イノベーションを生み出す、新たな科学知識に基づく革新的技術のシーズを創出することを目的とした基礎研究を推進します。国（文部科学省）が戦略目標を設定し、その下に推進すべき研究領域と研究領域の責任者である研究総括（プログラムオフィサー）をJSTが定めます。研究提案は研究領域ごとに募集し、研究総括が領域アドバイザーらの協力を得ながら選考します。

研究領域の下、「CREST」では選定された研究代表者が研究チームを編成して、「さきがけ」では研究者が個人で、研究を推進します。「ACT-X」は優れた若手研究者を見い出して育成するプログラムであり、研究総括および領域アドバイザーの助言・指導の下、若手研究者の個人研究を支援するものです。

なお2022年度の研究提案の募集は、2022年度に発足した新規研究領域と併せて、2020年度、2021年度に発足した研究領域についても実施します。（※「異分野融合による新型コロナウイルスをはじめとした感染症との共生に資する技術基盤の創生」領域の募集はありません）

今回、新たに設定する研究領域は以下の通りです。

CREST

「社会課題解決を志向した革新的計測・解析システムの創出」（研究総括：鷺尾 隆）

さきがけ

「物質と情報の量子協奏」（研究総括：小林 研介）

「文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創」（研究総括：栗原 聡）

「地球環境と調和しうる物質変換の基盤科学の創成」（研究総括：山中 一郎）

「加齢による生体変容の基盤的な理解」（研究領域統括：望月 直樹、研究総括：三浦 正幸）

ACT-X

「生命現象と機能性物質」（研究総括：豊島 陽子）

<募集期間>

2022年4月12日（火）～5月31日（火）正午（さきがけ・ACT-X）

2022年4月12日（火）～6月7日（火）正午（CREST）

研究提案募集の詳細については、別紙および下記ホームページを参照してください。

URL <https://www.jst.go.jp/kisoken/boshuu/teian.html>

<添付資料>

別紙：戦略的創造研究推進事業における2022年度の研究提案募集の概要

<お問い合わせ先>

科学技術振興機構 戦略研究推進部

〒102-0076 東京都千代田区五番町7 K's 五番町

前田 さち子（マエダ サチコ）

E-mail : rp-info[at]jst.go.jp

※お問い合わせは電子メールでお願いします。

戦略的創造研究推進事業における2022年度の研究提案募集の概要

1. 事業の趣旨

本事業は、我が国が直面する重要な課題の克服に向けて、挑戦的な基礎研究を推進し、社会・経済の変革をもたらす科学技術イノベーションを生み出す、新たな科学知識に基づく創造的な革新的技術のシーズ（新技術シーズ）を創出することを目的としています。

2. 事業の概要

国の科学技術政策や社会的・経済的ニーズなどを踏まえて国（文部科学省）が設定する「戦略目標」の下に、推進すべき研究領域と研究領域の責任者である研究総括（プログラムオフィサー）をJSTが定めます。研究総括は、戦略目標の達成へ向けて、科学技術イノベーションを生み出す革新的技術のシーズの創出を目指した戦略的な基礎研究を推進します。

本事業のうち、「CREST」「さきがけ」「ACT-X」では、研究総括が研究領域を「ネットワーク型研究所」として運営します。研究領域ごとに研究提案を募集し、研究総括が領域アドバイザーらの協力を得ながら選考します。研究領域の下で、選定された研究代表者が研究チームを編成し（CREST）、または研究者が個人で（さきがけ、ACT-X）、研究を推進します。

なお、さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」については、文部科学省が2022年度に設定した1つの戦略目標の下、JSTと日本医療研究開発機構（AMED）が3プログラム（さきがけ、AMED-CREST、PRIME）を同時に立ち上げ、法人を超えて互いに連携しながら研究を進める連携領域となっています。そのため、この領域では研究総括に加え、3プログラムの連携を統括する研究領域統括を配置します。

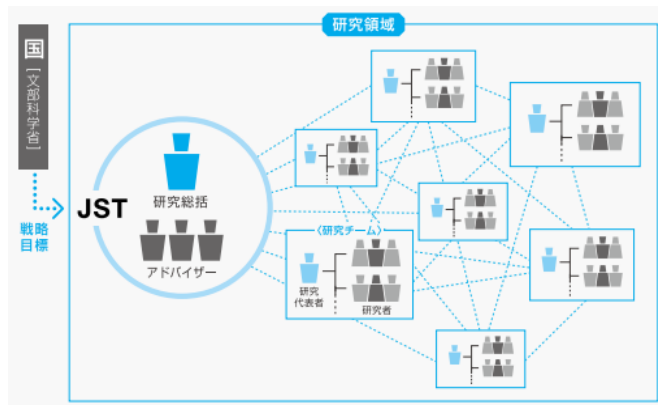


図1 研究の実施体制
(CRESTの場合)

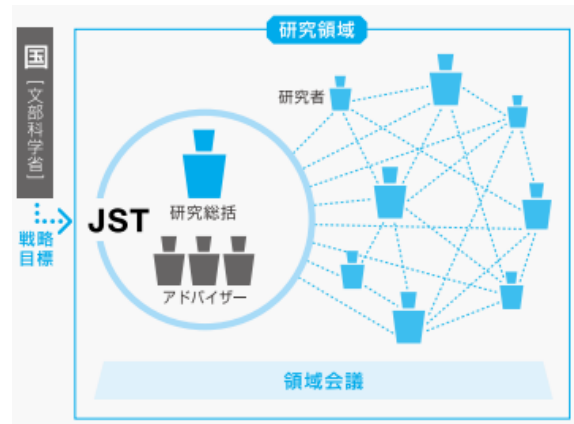


図2 研究の実施体制
(さきがけ、ACT-Xの場合)

3. 各研究タイプの概要と特徴

(1) CREST

- a. CRESTは、我が国が直面する重要な課題の克服に向けて、独創的で国際的に高い水準の目的基礎研究を推進し、社会・経済の変革をもたらす科学技術イノベーションに大きく寄与する、新たな科学知識に基づく創造的で卓越した革新的技術のシーズ（新技術

シーズ)を創出することを目的とするネットワーク型研究(チーム型)です。研究領域の責任者である研究総括が定めた研究領域運営方針の下、研究総括が選んだ、我が国のトップ研究者が率いる複数のベストチームが、チームに参加する若手研究者を育成しながら、戦略目標の達成に向けて研究を推進します。

- b. 研究総括が、産・学・官の各機関に所在する研究代表者を総括し、研究領域を「ネットワーク型研究所」として運営します。研究総括は、その研究所長の役割を果たす責任者として、領域アドバイザーなどの協力を得ながら以下の手段を通じて研究領域を運営します。
 - ・研究領域の運営方針の策定
 - ・研究課題の選考
 - ・研究計画(研究費、研究チーム編成を含む)の調整・承認
 - ・各研究代表者が研究の進捗状況を発表・議論する「領域会議」の開催、研究実施場所の訪問やその他の機会を通じた、研究代表者との意見交換、研究への助言・指導
 - ・研究課題の評価
 - ・その他、必要な手段
- c. 研究代表者は、自らが立案した研究構想の実現に向けて、複数の研究者からなる1つの最適な研究チームを編成することができます。研究代表者は、自らが率いる研究チーム(研究課題)全体に責任を持ちつつ、研究領域全体の目的に貢献するよう研究を推進します。

(2) さきがけ

- a. さきがけは、我が国が直面する重要な課題の克服に向けて、独創的・挑戦的かつ国際的に高水準の発展が見込まれる先駆的な目的基礎研究を推進し、社会・経済の変革をもたらす科学技術イノベーションの源泉となる、新たな科学知識に基づく創造的な革新的技術のシーズ(新技術シーズ)を世界に先駆けて創出することを目的とするネットワーク型研究(個人型)です。研究領域の責任者である研究総括が定めた研究領域運営方針の下、研究総括が選んだ若手研究者が、研究領域内および研究領域間で異分野の研究者ネットワークを形成しながら、戦略目標の達成を目指し、若手ならではのチャレンジングな個人型研究を推進します。
- b. 研究総括が、個人研究者を総括し、研究領域を「ネットワーク型研究所」として運営します。研究総括は、その研究所長の役割を果たす責任者として、領域アドバイザーなどの協力を得ながら以下の手段を通じて研究領域を運営します。
 - ・研究領域の運営方針の策定
 - ・研究課題の選考
 - ・研究計画(研究費計画を含む)の調整・承認
 - ・各個人研究者が研究の進捗状況を発表・議論する「領域会議」の開催、研究実施場所の訪問やその他の意見交換などの機会を通じた、個人研究者への助言・指導
 - ・研究課題の評価
 - ・その他、研究活動のさまざまな支援など、必要な手段
- c. 個人研究者は、自らが立案した研究構想の実現に向けて、自己の研究課題の実施に責任を持ちつつ、研究領域全体の目的に貢献するよう研究を推進します。

(3) ACT-X

- a. ACT-Xは、我が国が直面する重要な課題の克服に向けて、優れた若手研究者を発掘し、育成することを目的とするネットワーク型研究（個人型）です。研究総括が定めた研究領域運営方針の下、独創的・挑戦的なアイデアを持つ研究者を見いだし、科学技術イノベーションにつながる新しい価値の創造を目指した研究を行うことを支援し、研究総括および領域アドバイザーの助言・指導の下、若手研究者が独自のアイデアからなる研究を進め、研究領域内外の異分野の研究者と相互触発することで、研究者ネットワークを形成しながら研究者としての個を確立することを目指します。
- b. 今年度の募集では、以下の個人研究者を対象とします。
 - 2022年4月1日時点で博士の学位取得後8年未満
 - 博士の学位未取得の場合は、2022年4月1日時点で学士の学位取得後13年未満
 - 学位を取得後に取得した産前・産後の休暇・育児休業の期間を除くと上記該当年数未満上記にかかわらず、学生は大学院生に限り応募が可能です。大学院生や企業の若手研究者からの積極的な応募も期待しています。
- c. 個人研究者は、自らが立案した研究構想の実現に向けて、自己の研究課題の実施に責任を持ちつつ、研究領域全体の目的に貢献するよう研究を推進します。なお、学生など国籍機関（研究実施機関）の規定により委託研究費の執行権限を有さず委託研究契約の当事者となれない方が応募する場合には、指導教員なども委託研究契約における責任を負っていただきます。
- d. 研究総括が、個人研究者を総括するとともに、個人研究者それぞれに対してメンターの役割をも担う担当の領域アドバイザーを配置し、研究領域を「ネットワーク型研究所」として運営します。研究総括は、その研究所長の役割を果たす責任者として、領域アドバイザーなどの協力を得ながら以下の手段を通じて研究領域を運営します。
 - ・研究領域の運営方針の策定
 - ・研究課題の選考
 - ・研究計画（研究費計画を含む）の調整・承認
 - ・各個人研究者が研究の進捗状況を発表・議論する「領域会議」の開催、研究実施場所の訪問やその他の意見交換などの機会を通じた、個人研究者への助言・指導
 - ・研究課題の評価
 - ・その他、研究活動のさまざまな支援など、必要な手段

4. 文部科学省のAIPプロジェクト（人工知能／ビッグデータ／IoT／サイバーセキュリティ統合プロジェクト）における役割について

AIPプロジェクトは文部科学省において2016年度より開始された事業であり、世界最先端の人材を結集し、革新的な人工知能技術の中核として、ビッグデータ・IoT・サイバーセキュリティを統合した研究開発を行う拠点「AIPセンター」を理化学研究所で運営し、イノベーションを切り開く独創的な研究者などを支援する公募プログラムをJSTの戦略的創造研究推進事業の一部として推進します。

JSTでは、関係する研究領域群を「AIPネットワークラボ」と称して、2022年度発足領域ではさきがけ「文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創」の1つ（2020年度、2021年度発足領域と合わせて7つ）の研究領域で研究提案募集を実施します。

5. 各研究タイプの研究費や研究期間など

原則として下記の通りですが、各研究領域の運営方針により異なる場合があります。詳細は研究提案募集ウェブサイトの「提案を募集する研究領域」より各研究領域の募集方針をご確認ください。

URL <https://www.jst.go.jp/kisoken/boshuu/teian.html>

研究タイプ	研究期間内の研究費総額	研究期間
CREST	1.5～5億円	5年半以内
さきがけ	3～4千万円	3年半以内
ACT-X	数百万円を標準 (加速フェーズ ^注): 領域ごとに設定)	2年半以内 (加速フェーズ: さらに1年以内)

注) 加速フェーズ: ACT-Xの研究期間は2年半を標準としますが、採択された研究者が希望する場合は、その後に加速フェーズと呼ばれる追加支援を1年間受けられる可能性があります。加速フェーズの支援を受けられる課題数、研究費は研究領域ごとに設定します。

6. 研究提案を募集する研究領域と募集期間

2022年度に研究提案を募集する研究領域と募集期間は、以下の通りです。

2022年度の研究提案の募集・選考は、2020年度、2021年度に発足した研究領域と2022年度に発足する新規研究領域で行います。(※「異分野融合による新型コロナウイルスをはじめとした感染症との共生に資する技術基盤の創生」領域の募集はありません)

なお、研究提案者として応募できるのは「CREST」、「さきがけ」、「ACT-X」のいずれか1件のみです。重複して応募することはできません。ただし、2022年度より「さきがけ」、「ACT-X」個人研究者と「CREST」の主たる共同研究者を同時に応募、実施することを可能とします。

CREST: 2022年4月12日(火)～6月7日(火) 正午
さきがけ・ACT-X: 2022年4月12日(火)～5月31日(火) 正午

CREST

2022年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>社会課題解決を志向した計測・解析プロセスの革新</p>	<p>「社会課題解決を志向した革新的計測・解析システムの創出」</p> <p>本研究領域は、計測技術の進化と最先端の数理モデリング・機械学習等の情報技術とを組み合わせ、計測・解析手法を高度に進化させることにより、計測・解析における現実の様々な難課題を解決でき、また、今後、10年・20年にわたり我が国の研究環境上のアドバンテージとして計測・解析プロセスを革新できる、新たな計測・解析システムの創出を目指します。</p> <p>具体的には、「先端計測限界突破」、「計測データインフォーマティクス活用」、「マルチスケール・マルチモーダル計測、ユースケース開拓」を主要な研究要素とし、これらが連携する研究環境を実現することで、計測・解析の革新を図ります。</p>	<p>鷺尾 隆 （大阪大学産業科学研究所 教授）</p>

2021年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>資源循環の実現に向けた結合・分解の精密制御</p>	<p>「分解・劣化・安定化の精密材料科学」</p> <p>本研究領域は、外部刺激により材料を自在に分解する手法を開発するとともに、分解を自在に制御できる材料の開発、それら材料の階層構造制御による高機能化に関する研究、材料における環境に優しい劣化や安定化の制御法を開発を通じて、材料の分解・劣化・安定化の精密制御を達成し、究極の相反する物性である分解性と安定性の自在制御が可能なサステイナブル材料開発のための精密材料科学の確立を目指すものです。</p>	<p>高原 淳 （九州大学ネガティブエミッションテクノロジー研究センター 特任教授）</p>

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>Society 5.0時代の安心・安全・信頼を支える基盤ソフトウェア技術</p>	<p>「基礎理論とシステム基盤技術の融合によるSociety 5.0のための基盤ソフトウェアの創出」(AIPネットワークラボ)</p> <p>本研究領域では、基礎理論分野とシステム基盤技術分野を横断的に融合・統合する研究開発の推進により、Society 5.0時代の安心・安全・信頼を支える革新的な基盤ソフトウェアの創出を目指します。具体的には、以下の3つの達成目標に取り組みます。</p> <p>(1) 信頼できないハードウェアやOSを含む計算環境で安全なシステムを構築可能とするセキュリティ技術の創出</p> <p>(2) オープンな環境でもプライバシーを確保するデータ収集・解析技術の創出</p> <p>(3) データの自由な流通と個人情報の安全性確保を両立するシステム実装技術の確立</p>	<p>岡部 寿男 (京都大学 学術情報メディアセンター センター長・教授)</p>
<p>『バイオDX』による科学的発見の追究</p>	<p>「データ駆動・AI駆動を中心としたデジタルトランスフォーメーションによる生命科学研究の革新」(AIPネットワークラボ)</p> <p>本研究領域は、情報科学・工学・生命科学が三位一体となって生命科学研究におけるDX(デジタルトランスフォーメーション)を推進する、いわば「データ駆動型・AI駆動型」の研究によりこれまで手が届かなかったような高度な科学的発見を目指します。</p> <p>具体的には、(1) 多様、大量のデータセットからAIなどデジタル情報処理技術を活用することでデータ取得・解析の質的・量的限界を超えて、新しい生命現象とそのモデル化を可能とするための研究開発を行い、次世代型生命科学研究のモデルケースを示すことを目指します。また、そのために必要な要素課題として(2) 革新的なデータ駆動型研究手法やAI駆動型研究の手法の確立に向けた研究開発もサポートします。</p> <p>上記により、生命科学研究におけるパラダイムシフトの潮流を作るとともに、複雑な生命システムの解明が可能な社会、研究者が真に創造的な活動に取り組むことができる社会の実現を目指します。</p>	<p>研究総括： 岡田 康志 (理化学研究所 生命機能科学研究センター チームリーダー／東京大学 大学院医学系研究科 教授)</p> <p>研究総括補佐： 高橋 恒一 (理化学研究所 生命機能科学研究センター チームリーダー)</p>

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>元素戦略を基軸とした未踏の多元素・複合・準安定物質探索空間の開拓</p>	<p>「未踏探索空間における革新的物質の開発」 本研究領域は、元素の潜在能力を最大限に引き出すとともに、元素の組み合わせがもたらす膨大な物質探索空間を開拓することにより、複数元素のシナジー効果による革新的な機能・物性を有する新材料を創出することを目的とします。具体的には、無機物質、有機物質を問わず、物質探索空間を複合化・多元素化・準安定相などの未踏の領域に拡大し、効率的に物質探索を進める戦略的な取り組みを重視します。</p>	<p>北川 宏 (京都大学大学院理学研究科 教授)</p>
<p>ヒトのマルチセンシングネットワークの統合的理解と制御機構の解明</p>	<p>「生体マルチセンシングシステムの究明と活用技術の創出」 本研究領域では、従来の各感覚モダリティや生物階層の境界条件内に特化した要素還元的な研究ではなく、生体内外からのさまざまな環境情報入力が全身生理機能に与える影響とそのメカニズム・ネットワークを解明する研究や、それらを生かしてマルチモーダルな感覚情報を統合的に理解し、生体センサーフュージョンを実現するための技術開発を推進します。また、マルチセンシングメカニズムを可視化、操作、伝送、提示するための基盤・応用技術の創出も目指します。加えて、ヒトには本来備わっていない多彩なセンシング能力(多様な生物が進化の過程で獲得した能力や、現代科学技術が可能にした能力など)を解明し、ヒトのセンシングシステムの新たな理解の切り口とし、これらを活用可能とする原理や有用なデバイスの開発を推進します。 JSTと日本医療研究開発機構(AMED)が4プログラム(CREST、さきがけ、AMED-CREST、PRIME)を同時に立ち上げ、互いに連携しながら研究を進めます。</p>	<p>研究領域統括： 永井 良三 (自治医科大学 学長)</p> <p>研究総括： 入来 篤史 (理化学研究所 生命機能科学研究センター チームリーダー)</p>

2020年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
自在配列と機能	<p>「原子・分子の自在配列・配向技術と分子システム機能」</p> <p>本研究領域は、原子・分子の配列や配向を合理的に制御した原子・分子組織構造を自在に構築し、そのエネルギーランドスケープを制御するとともに、その組織構造に独自の化学的、物理的、あるいは生物科学的な機能を発揮させるための基盤技術の創出を目指すものです。</p>	<p>君塚 信夫 （九州大学大学院工学研究院 主幹教授）</p>
情報担体と新デバイス	<p>「情報担体を活用した集積デバイス・システム」</p> <p>本研究領域は、デバイス内で情報の鍵を握る「情報担体」の特性を活用した高性能・高機能デバイスを創出し、さらにこれらを集積化・システム化することにより社会実装可能な情報システム基盤技術を創成します。情報の取得、変換、記憶、演算、伝達、出力などのデバイス機能の根幹を成す多様な情報担体を深く掘り下げ、かつ高度に利用することによって革新的なデバイスを創出します。さらに社会実装可能なシステム構築へと導くため、単体デバイスによる機能発現にとどまらず、集積化・システム化を行うことにより、回路・アーキテクチャー・システム・アプリケーションレイヤーとの協働を進め、革新的な情報システム基盤のイノベーションを目指します。</p>	<p>平本 俊郎 （東京大学生産技術研究所 教授）</p>
信頼されるAI	<p>「信頼されるAIシステムを支える基盤技術」（AI Pネットワークラボ）</p> <p>本研究領域は、人間が社会の中で幅広く安心して利用できる「信頼される高品質なAI」の実現につながる基盤技術の創出やそれらを活用したAIシステムの構築を行います。研究に当たっては、人間中心のAIシステムに関する信頼性や安全性等の定義や評価法の検討に取り組み、AIシステム全体としてその要求や要件を満たす技術の確立を目指します。</p>	<p>相澤 彰子 （国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 教授）</p>
細胞内構成因子の動態と機能	<p>「細胞内現象の時空間ダイナミクス」</p> <p>本研究領域は、超分子複合体からオルガネラ、非膜オルガネラに至る細胞内の高次構造体の微小空間でのダイナミクスを観察・計測し、その機能相関を解析することにより細胞の統合的理解を目指します。</p>	<p>遠藤 斗志也 （京都産業大学 生命科学部 教授）</p>

さががけ

2022年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
量子情報と量子物性の融合による革新的量子制御技術の創成	<p>「物質と情報の量子協奏」</p> <p>本研究領域は、革新的量子制御技術の創成を目的として、量子情報の視点に立脚しながら量子物性をテクノロジーへと転換していく独創的で挑戦的な研究を推進します。具体的には、量子情報に基づいた量子物質における新しい量子状態制御手法の開拓、新原理量子ビット・量子センサ・量子シミュレーションの提案と実証、将来的に実現可能な物理系を念頭においた量子アルゴリズムの提案と実証などを対象とします。</p>	<p>小林 研介 （東京大学大学院理学系研究科 教授）</p>
文理融合による社会変革に向けた人・社会解析基盤の創出	<p>「文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創」（AIPネットワークラボ）</p> <p>本研究領域は、行動変容等の社会変革に向けた基盤として、様々なスケール・種類のデータから人や社会を解析する技術、それに基づいたシミュレーションにより政策シナリオ等を導出する技術を、人文・社会科学と自然科学の融合によって共創することを目指します。</p> <p>具体的には、防災・減災・リスク管理、感染症対策・リモート化するAfterコロナ社会、社会・経済格差、Web・ソーシャルメディアの健全な利活用等の社会課題をテーマとして、1) マルチスケール（個人、コミュニティ、社会）の活動データや人文・社会科学の知見に基づく、人や社会の行動特性・嗜好の導出、行動判断等をもたらす要因の特定やそれらのモデル化・数値化等、2) モデル化・数値化した人や社会の特性を導入したマルチエージェント等のシミュレーションにより、政策立案・決定等に資するシナリオの導出、3) 導出される政策シナリオ等の効果や社会受容性の向上手法の探索及び1)・2)のへのフィードバック、等の研究に取り組みます。</p>	<p>栗原 聡 （慶應義塾大学 理工学部 教授）</p>

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>「総合知」で切り拓く物質変換システムによる資源化技術</p>	<p>「地球環境と調和しうる物質変換の基盤科学の創成」</p> <p>本研究領域は、人間社会が地球環境と調和するために不可欠な物質循環に関わる元素からなる安定な分子から、エネルギー消費と廃棄物排出を極力抑制しながら、目的である有価値物質を高い選択性で変換できる物質変換の研究開発とこれに関わる基礎科学の創出を目指します。</p> <p>具体的には、地球表面に豊富に存在し、人をはじめとする生物や食物を構成している元素、あるいは人間社会で利用されている元素の中で物質循環が重要とされている元素およびその化合物（主に炭素、窒素、酸素、水素、リン、硫黄、ケイ素などとその化合物）を対象とした物質変換に関わる基礎的な研究開発を行います。</p>	<p>山中 一郎 （東京工業大学 物質理工学院 教授）</p>
<p>老化に伴う生体ロバストネスの変容と加齢性疾患の制御に係る機序等の解明</p>	<p>「加齢による生体変容の基盤的な理解」</p> <p>本研究領域は老化を、「加齢によって生体がロバストネスとレジリエンスの変容をきたす現象」として捉え、本研究領域では広範な生命科学的アプローチによって加齢におけるロバストネスとレジリエンスの変容に関する基盤的な理解を目標とします。</p> <p>これらの加齢による生体変容を理解するためには、これまで生命・医学研究で培われてきた計測・解析技術、例えば各種オミクス技術やイメージング技術、データ解析やシミュレーション、ゲノム編集技術等を総動員し、さらに他分野の科学技術をも積極的に取り入れて挑む必要があります。また、今まで使われてきたモデル生物（マウス、小型魚類、ショウジョウバエ、線虫、酵母等）に加えて、短命種や長命種の新規モデル生物、本領域の研究に資するオルガノイド開発までも対象とします。</p>	<p>研究領域 統括： 望月 直樹 （国立循環器病研究センター 理事・研究所長）</p> <p>研究総括： 三浦 正幸 （東京大学大学院薬学系研究科 教授）</p>

2021年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>資源循環の実現に向けた結合・分解の精密制御</p>	<p>「持続可能な材料設計に向けた確実な結合とやさしい分解」 本研究領域では、資源の有効利用や持続可能な材料生産システムの構築を目指して、「確実な結合とやさしい分解」を兼ね備えたサステナブル材料の創製に向けた独創的な基盤技術の研究開発を目的とします。確実な結合とは、使用中は優れた機能や性能を安定的に発揮するための結合や構造で、やさしい分解とは、使用後は再利用可能な材料に変換するために、温和な条件下で原子・分子レベルあるいは中間・部分構造に速やかに分解することです。</p>	<p>岩田 忠久 （東京大学大学院農学生命科学研究科教授）</p>
<p>複雑な輸送・移動現象の統合的理解と予測・制御の高度化</p>	<p>「複雑な流動・輸送現象の解明・予測・制御に向けた新しい流体科学」 本研究領域では、近年その発展が目覚ましい、流れの数値シミュレーションのための環境や手法、流れの計測技術、そして、これらにより得られた膨大なデータを解析する応用数学的手法を駆使し、これまで困難であった複雑な流動・輸送現象の抜本的な解明や、より正確な予測および高度な制御法の確立に向けた、新しい流体科学の基盤を構築することを目的とします。</p>	<p>後藤 晋 （大阪大学大学院基礎工学研究科教授）</p>
<p>Society 5.0時代の安心・安全・信頼を支える基盤ソフトウェア技術</p>	<p>「社会変革に向けたICT基盤強化」(AIPネットワークラボ) 本研究領域では、理論（数学や計算機科学の基礎）と社会システムの基盤技術（アルゴリズム、アーキテクチャー、OS、ネットワーク、データベース、IoT、セキュリティー、言語など）の研究者の領域内の交流・触発により国際競争力を強化した科学技術イノベーションの創出を実現し、社会変革に向けたICT基盤の強化を目指します。さらに、将来の社会システムの課題解決や社会変革を意識した研究開発を通して、構想段階からセキュリティーやプライバシーを考慮したシステム設計・構築を推進するリーダー人材の育成に取り組みます。</p>	<p>東野 輝夫 （京都橘大学工学部 情報工学科 教授・副学長）</p>

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>元素戦略を基軸とした未踏の多元素・複合・準安定物質探索空間の開拓</p>	<p>「物質探索空間の拡大による未来材料の創製」 本研究領域は、われわれが直面する環境・資源・エネルギー、医療・健康などに代表される社会課題を解決するために、従来の技術とは異なる非連続な概念・コンセプトを探求したシンプルかつ斬新なアイデアにより、これまでの物質探索空間の枠を超えた、革新的な新機能性材料の創出を目指します。</p>	<p>陰山 洋 (京都大学大学院工学研究科 教授)</p>
<p>「総合知」で築くポストコロナ社会の技術基盤</p>	<p>「パンデミックに対してレジリエントな社会・技術基盤の構築」 本研究領域では、繰り返される感染症の脅威に人類がどのように対応してきたのか長い歴史を振り返るとともに、COVID-19対応により見えてきた社会的・技術的課題の本質を見極め、さまざまな専門性を持った研究者が結集しネットワークを形成しながら、あらゆる立場の人々が共生しつつ感染状況に応じた適切な対策を取ることを可能とする持続可能な社会を作り出すための社会・技術基盤の構築を目指します。</p>	<p>押谷 仁 (東北大学大学院医学系研究科 教授)</p>
<p>ヒトのマルチセンシングネットワークの統合的理解と制御機構の解明</p>	<p>「生体多感覚システム」 本研究領域では生命活動における生体多感覚システムの機能解明とその機能や作動原理を応用した技術開発を推進します。生体内では、インプットされた外的・内的な刺激はさまざまな感覚受容器で特殊感覚・内臓感覚・体性感覚などの感覚情報として符号化され、電気信号に変換されたのち、末梢神経を経て中枢神経に伝達されます。そのような多様な生体感覚と末梢神経のネットワークを統合した生体多感覚システムの包括的な解明を目指します。 JSTと日本医療研究開発機構(AMED)が4プログラム(CREST、さきがけ、AMED-CREST、PRIME)を同時に立ち上げ、互いに連携しながら研究を進めます。</p>	<p>研究領域統括： 永井 良三 (自治医科大学 学長) 研究総括： 神崎 亮平 (東京大学先端科学技術研究センター 所長・教授)</p>

2020年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
自在配列と機能	<p>「原子・分子の自在配列と特性・機能」</p> <p>本研究領域では、原子や分子を自在に結合、配列、集合する手法を駆使して、次元性、階層性、均一・不均一性、等方・異方性、対称・非対称性、複雑性などの観点からユニークな構造をつくり出し、その構造がもたらす新しい化学的、物理的、生物学的並びに力学的に新奇な特性や機能を引き出すことによって、基礎科学のイノベーションを起こすとともに、社会インフラや生活を豊かにする革新的な物質科学のパラダイムを構築することを目的とします。</p>	<p>西原 寛 （東京理科大学 研究推進機構 総合研究院 教授）</p>
情報担体と新デバイス	<p>「情報担体とその集積のための材料・デバイス・システム」</p> <p>本研究領域は、デバイス内で情報の鍵を握る「情報担体」の特性を活用した高性能・高機能デバイスを創出し、さらにこれらを集積化・システム化することにより社会実装可能な情報システム基盤技術を創成します。特に本研究領域では、個人のアイデアに基づいた挑戦的な材料・デバイス・システムの基礎研究に注力します。</p>	<p>若林 整 （東京工業大学 工学院 教授）</p>
信頼されるAI	<p>「信頼されるAIの基盤技術」（AIPネットワークラボ）</p> <p>本研究領域では、人間中心のAI社会の実現に向け、現在のAI技術の限界を突破する次世代AI技術の基盤となる革新的な理論・技術の創出を目指します。従来のAI技術の単なる延長ではなく、現在のAI技術やAIシステムが持つ本質的な問題点に取り組み、解くべき問題を新たな視点で概念化・定式化し、その解決を目指す挑戦的な研究を推進します。</p>	<p>有村 博紀 （北海道大学 大学院情報科学研究科 教授）</p>
革新的植物分子デザイン	<p>「植物分子の機能と制御」</p> <p>本研究領域は植物分子（植物由来化合物およびその関連遺伝子）を軸として、生体内および生態系内の生命現象の解明と、その有効利用に資する基礎的知見の創出と革新技術の構築に向けた研究を推進します。この目的のために「生体内における植物分子の機能と制御」、「生態系内における植物分子の機能と制御」、「植物分子の探索と設計・制御技術の開発」の3つを領域の柱とし、異分野の連携・融合を積極的に進めます。</p>	<p>西谷 和彦 （神奈川大学 理学部 教授）</p>

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
細胞内構成因子の動態と機能	<p>「細胞の動的な高次構造体」</p> <p>細胞が示す多彩な機能は、分子複合体からオルガネラに至る動的な高次構造体によって支えられています。本研究領域は、そのような動的な高次構造体の性質を分子の視点に基づいて解析し、機能発現の普遍的メカニズムの解明を目指します。</p>	野地 博行 (東京大学大学院工学系研究科 教授)

ACT-X

2022年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
<p>老化に伴う生体ロバストネスの変容と加齢性疾患の制御に係る機序等の解明</p> <p>ヒトのマルチセンシングネットワークの統合的理解と制御機構の解明</p> <p>革新的植物分子デザイン</p> <p>細胞内構成因子の動態と機能</p> <p>多細胞間での時空間的な相互作用の理解を目指した技術・解析基盤の創出</p> <p>ゲノムスケールのDNA合成及びその機能発現技術の確立と物質生産や医療の技術シーズの創出</p> <p>実験とデータ科学等の融合による革新的材料開発手法の構築</p>	<p>「生命現象と機能性物質」</p> <p>「生命現象」、「機能性物質」という2つのキーワードの下に、多様な分野にわたる挑戦的な若手研究者による新しい価値の創造につながる基礎的な研究を推進します。具体的には、「生命現象」に関連する新規物質・材料の設計・創成及び生体分子や微生物等の発見や機能解析、活用など生命現象の解明・制御・応用に関する研究を対象とします。また、物質・材料と生体の相互作用に関わる計測や評価に関する研究も含まれます。</p>	豊島 陽子 (東京大学大学院総合文化研究科 名誉教授)

2021年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
「総合知」で築くポストコロナ社会の技術基盤	<p>「リアル空間を強靱にするハードウェアの未来」</p> <p>本研究領域では、将来の強靱社会を構成するリアル側の技術、より具体的には、ハードウェア、デバイス、モジュールなどといわれる「もの」に関する先進的かつ挑戦的なアイデアを持つ若手研究者を支援します。</p> <p>研究推進に当たっては、研究者育成の観点を重視し、異分野の若手研究者同士が交流し相互に触発する場を設けることで、未来に貢献する先端研究を推進する研究者の育成、および将来の連携につながる幅広い人的ネットワークの構築を図ります。</p>	<p>田中 秀治 (東北大学 大学院工学研究科 教授)</p>
情報担体と新デバイス		
次世代IoTの戦略的活用を支える基盤技術		
情報デバイスの超低消費電力化や多機能化の実現に向けた、素材技術・デバイス技術・ナノシステム最適化技術等の融合による革新的基盤技術の創成		
ネットワークにつながれた環境全体とのインタラクションの高度化		
微小エネルギーの高効率変換・高度利用に資する革新的なエネルギー変換機能の原理解明、新物質・新デバイスの創製等の基盤技術の創出		

2020年度発足研究領域

戦略目標	研究領域とその概要	研究総括
気候変動時代の食料安定確保を実現する環境適応型植物設計システムの構築	<p>「AI活用で挑む学問の革新と創成」(AIPネットワークラボ)</p> <p>本研究領域では、理工系や人文社会系を含むあらゆる学問分野に最先端のAIなどの情報科学技術を取り込むことで格段に強化・発展させることや、AIなどの情報科学技術との融合による学問分野の革新や新たな学問領域の創成、新しい価値の創造などを旨とする若手研究者による挑戦的な研究構想を求めます。</p>	<p>國吉 康夫 (東京大学大学院情報理工学系研究科教授)</p>
急速に高度化・複雑化が進む人工知能基盤技術を用いて多種膨大な情報の利活用を可能とする統合化技術の創出		
実験とデータ科学等の融合による革新的材料開発手法の構築		
次世代IoTの戦略的活用を支える基盤技術		
多細胞での時空間的な相互作用の理解を目指した技術・解析基盤の創出		
信頼されるAI		
気候変動時代の食料安定確保を実現する環境適応型植物設計システムの構築	<p>「環境とバイオテクノロジー」</p> <p>本研究領域では、バイオテクノロジー分野において新分野開拓や新価値創造につながる基礎研究を推進し、将来、真に環境問題に貢献できる技術と人材の創出を目指します。例えば、複合微生物・生物間相互作用・共生、環境生態モニタリング、あるいは、生物機能を利用した環境浄化・制御や再生可能な生物資源およびそれらの廃棄物を利活用したマテリアルやスマート物質生産などの幅広い分野において、新たな発想に基づいた先駆的なテーマを支援します。さらには、新たな生物機能の発見・創出・利用・評価解析手法の開発なども含め、環境への貢献につながる挑戦的な研究構想を幅広く求めます。</p>	<p>野村 暢彦 (筑波大学生命環境系教授／微生物サステナビリティ研究センター センター長)</p>
ゲノムスケールのDNA合成及びその機能発現技術の確立と物質生産や医療の技術シーズの創出		
革新的植物分子デザイン		

7. 研究提案の受付方法

2022年度の応募は「府省共通研究開発管理システム（e-Rad）」により受け付けます。

府省共通研究開発管理システム（e-Rad）ポータルサイト

URL <https://www.e-rad.go.jp/>

8. 研究提案募集に関するお問い合わせ先

科学技術振興機構 戦略研究推進部

〒102-0076 東京都千代田区五番町7 K's 五番町

前田 さち子（マエダ サチコ）

E-mail : rp-info@jst.go.jp

※お問い合わせは電子メールでお願いします。